

長谷部史親●著
推理小説に見る古書趣味

図書出版社

小説に見る古書趣味

史親●著

推理小説に見る古書趣味

一九九三年一月二十日初版第一刷発行◎

著者 長谷部史親

発行者 小川道明

発行所 株式会社 図書出版社

(営業部) 東京都新宿区白銀町一六番地／
郵便番号一六二〇電話〇三―三二六〇―〇〇二一／
FAX〇三―三二六七―〇四五八
(編集部) 東京都新宿区簗笥町三九番地
大崎ビル五〇一号／郵便番号一六二〇／
電話〇三―三二六〇―〇一三五／
FAX〇三―三二六七―〇二八一
振替東京二―一〇七―一七二

印刷 明和印刷株式会社

製本 小高製本工業株式会社

装幀 熊谷博人

Printed in Japan

ISBN 4-8099-0507-1 C0090

落丁・乱丁本はお取り替えいたします

はじめに

どういふわけか、熱心な推理小説ファンには、熱心な古書蒐集家が少なくない。基本的には本が好きというところから始まっているのであろうが、ともにマニアックな関心の対象となる点に共通項が見いだせる。そしてまた、特異性のある推理小説にかぎって、大衆的な読者をかちえることが困難なために、出版されても早々に絶版扱いになりがちで、手に入れたければ古書で探さなければならぬという状況とも無縁ではあるまい。

確実な根拠があるわけではないものの、ここ二十年くらいの間に古書としての推理小説書への注目度が高まったように見受けられ、古書価格も徐々に上昇している。これは推理小説ファンが増えたというだけでなく、ある意味では在来の文学書初版本コレクターが大衆文芸書に進出したからだとの声も聞かれた。本文の中でもふれているように、こうした傾向は何も日本だけの現象ではなくて、アメリカやイギリスでも同様らしい。むしろ英米の方が、推理小説に関しても古書流通に関してもスケールが大きいかもしれない。

そんなこともあって、推理小説の中に描かれた古書の世界に着目して、気軽な読物にまとめ

てみようと考えたのが本書の出発点である。ただし、古書の世界といっても、古書店のみには限定していない。たとえば個人の蔵書にしても、また図書館などに収蔵されている本も、ある意味では古い書物にはちがいないからである。古書を探したり買ったりする興味にとどまらず、もっと広い概念で古い書物を捉えてみたかったこともあるし、珍しい本や高額の本の品定めをしているだけでは単調に陥ってしまいかねない。

それと同時に、該当する小説を紹介したり、適当な場面を摘録しているばかりでは、あまりにも能がないように思えたので、作品や作者の周辺事情にも筆を及ぼすよう心がけた。さらにもう一步踏み込んで、推理小説をどのように捉え、どのように楽しむことができるのかという問題も念頭に置いている。推理小説もひとつの文化である以上、過去を探るのも大切だが、その一方で現在や未来を無視するわけにはいかない。古書に関する話題が中心だから、どうしても過去の事実の羅列に追われがちだが、推理小説に対する自分なりの考え方を反映させることにも留意した。

学術的でも専門的でもないが、本書のような軽い読物を通して、推理小説の魅力や、文化としての意義が、一端なりとも伝えられたならと祈念してやまない。

推理小説に見る古書趣味
目次

はじめに

第一章 エリザベス・デイリイの作品

9

第二章 ピエール・ヴェリの「絶版殺人事件」

25

第三章 ヘミングウェイの手稿をめぐる

41

第四章 古書店の中のフィリップ・マローウ

55

第五章 パルプ・マガジンへの執着を示す探偵たち

第六章 鞍馬天狗のモデルが古書店を訪れるとき

83

第七章 副業に古書店を営む泥棒

99

第八章 フランス文学との接近遭遇

113

第九章 貴族探偵のもうひとつの趣味

123

第十章 ブリキの玩具に熱狂する人々

137

第十一章 図書館の本が切り裂かれるとき

151

第十二章 ロマンスをとりもつ古書 165

第十三章 情報センターとしての古書店 177

第十四章 英米の短篇作品の中から 189

第十五章 日本の推理小説の諸作品 201

あとがき
人名索引 222 215

推理小説に見る古書趣味

第一章 エリザベス・デイリイの作品

一般的にいつて、古書の世界に材を取った翻訳推理小説を話題にしようとする場合、あたかも判で捺したかのように、イの一番に名前が挙がってくる作品がある。それが、アメリカの作家マルコ・ペイジが書いた『古書殺人事件』ではないかと思う。後でもいうように、その直接の原因はたぶん邦題のせいであろう。この作品は原題を *Fast Company* といい、マルコ・ペイジの最初の長篇推理小説として一九三八年に発表された。原題は「手早い連中」とでもいったような意味であり、古書流通の諸局面に携わる一群の特性もしくは才能を示しているように考えられる。邦訳版は昭和三十年に中桐雅夫訳で、早川書房の『世界探偵小説全集』（現在の《ハヤカワ・ミステリ》）の一冊として刊行された。

その『古書殺人事件』の内容はどのようなものかといえば、稀覯本を専門とする古書業者ジョエル・グラスを主人公に、珍本を探求する顧客の熱意や古書流通にまつわる様々な情況が、いつしか殺人事件を引き起こすといった具合に展開してゆく。したがって、もちろん『古書殺人事件』という邦題に嘘があるわけではない。そして「××殺人事件」とかいうのは、推理小説のタイトルとしてはいかにも典型的なものであろう。しかもその「××殺人事件」に「古書」を冠した邦題は、まさにそのものズバリというほかない。古書を探求する意思の強烈さは、時に殺意にすらたとえられることがあり、古書好きの推理小説マニアにとっては、実に魅力的なテーマといえよう。

現実の問題として、この『古書殺人事件』の邦訳書は、一時期にはかなり高い古書価を呼んでいた。昭和二十八年（一九五三年）にスタートして以来、平成四年（一九九二年）現在で一千五百点に迫る刊行点数を誇る《ハヤカワ・ミステリ》叢書には、当然ながら品切絶版扱いの書目が多い。一九七〇年代の初めごろから、品切本の内の一部の古書価が上昇し始め、八〇年代の前半には一冊あたり数千円から一万円以上にも上るものが少なくなかった。そうした趨勢の下で、古書がらみのタイトルのついた『古書殺人事件』の価格が高騰したのは、いわば必然的ななりゆきであろう。

しかるに昭和五十八年に同叢書が創刊三十周年を迎えた際に、それを記念した復刊セールが企画され、その中には本書も加えられていた。この時の再刊は原版に基づく写真複製版であり、発行部数は必ずしも多くなかったようだが、推理小説ファンはもちろん古書マニアにも歓迎されたと見えて、ほどなく売り切れになったらしい。そしてその後でさらに、新組による再刊版も刊行されている。当然ながら新組版の方が印刷の仕上がりがいいわけだが、元版のやや古めかしい書体の味も捨てがたい。両者を比べてみると、同じ出版社の同じシリーズ本で使われた活字のフォントにも、三十年の間に大きな変化が見られるのがわかる。ともあれ、こうした経過をたどるにつれて、一時期の希少性はすっかり薄れてしまった。

いったいに翻訳文学書の古書価格は、初めて邦訳された場合にまつわる歴史的意義や、翻訳

者への人気、あるいは特装版・限定版などの特殊な事情を別にするなら、当該作品を新刊書店で入手して読むことができるかどうかに左右されるケースがほとんどである。それゆえ復刊セーラーや、それに続く重版によって、この『古書殺人事件』の古書価はしだいに鎮静化へと向かった。しかしながら昭和三十年に刊行された訳書の初版本は、やはりそれなりに高値を呼んでいるわけだし、今後また重版本の古書価が高騰する可能性がないわけではない。

本来なら話の進行の上では、まず『古書殺人事件』の物語展開について詳しく紹介するのが手順であろう。だが以上に述べたような理由もあって、古書ならびに推理小説愛好家には周知の作品と考えられるので、あえてここでは贅言を費やすのを避けたい。わりあいたやすく入手できる現時点において、単に内容を知りたい人にとっては、むしろ現物を手にした方が早道だというような含みもある。だからだとストーリーを叙述するのは、おそらくは紙面の無駄遣いにちがひあるまい。そんなわけで本稿では、この作品が成立した周辺事情に着目してみたい。

さて『古書殺人事件』を書いたマルコ・ペイジ (Marco Page) は、本名をハリー・カーニッツ (Harry Kurnitz) とし、一九〇九年一月五日にフィラデルフィアで生まれている。

ペンシルヴァニア大学で学んだ後に、新聞や雑誌等を舞台に書評や音楽評を手がけ、一九三八年からはMGM映画のシナリオを書くようになった。したがって執筆活動の殆どは映画シナリオで、自作の『古書殺人事件』の脚色をはじめ、有名なダシール・ハメットの『影なき男』に

基づく連作映画の一部など、その方面では多くの業績がある。後年の巨匠ビリー・ワイルダーと一緒に仕事をしたこともあったらしい。

もっぱら映画方面の仕事に精力を傾注したせいもあるが、長篇推理小説の著書はマルコ・ペイジ名義で三作、本名のハリー・カーニッツ名義で一作と、全部で僅か四冊にすぎない。そのほかに一九五〇年代から六〇年代にかけては、映画シナリオとは別に舞台演劇用の戯曲もいくつか書いている。亡くなったのは一九六八年三月十八日のことで、享年五十九であった。長生きの作家が多くなった今世紀では、どちらかといえば早死にの部類に属すのではなからうか。調べてみるとハリー・カーニッツという人は、もともと古書を含む書物一般に大きな関心を寄せていたらしい。最初の小説『古書殺人事件』を上梓するにあたって、自ら命名したマルコ・ペイジという筆名は、書物の頁 (page) に由来するともいわれている。彼が第一作において、あえて古書の世界に取材したのも当然のなりゆきであろう。同時に、全盛期にあったハリウッドで映画の仕事に携わりながら、なおかつ小説の分野にも意欲を示したのは、たぶんそういう性向の表れにちがいない。ここに、彼の活字メディアにこだわる姿勢を見てとることができる。

本来、映画シナリオというのは、映画という作品を作るための一素材にすぎない。だから物書きを志す人間にとって、単なる素材として埋もれてしまうより、最終的に自分の作品として